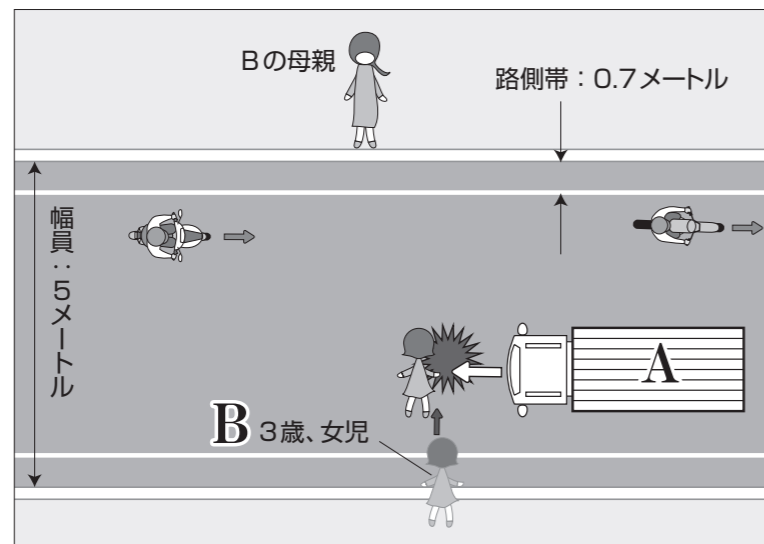


職場における交通安全指導

Part 111

住宅街の狭い生活道路で、飛び出した幼児に衝突



■事故の概要

- 発生日時
日 時：平成24年4月某日 午前10時頃
天 候：曇り
- 道路状況
住宅街、中央線のない生活道路
- 事故の当事者
運転者A（普通貨物車）：23歳、男性
被害者B（歩行者）：3歳、女児
- 被害状況
A：左前照灯付近凹損
B：重傷（右側頭部打撲、右肘部骨折）

事故状況

普通トラックの乗務経験が4年のAは、県内にある建築資材関係を搬送する運送会社に勤務して2年目を迎え、同社の配送業務にもようやく慣れ、事故歴もなく模範的なドライバーである。

事故の当日は、北関東方面の納品先へ配送予定であった。朝礼時に運行管理者から、乗車する車両の点検や配送ルートの確認等、その他の指導を受けて運行前点検を実施後、納品先へと向かった。東名高速から首都高速を經由して東北自動車道を走行し、納品先に近いインターチェンジを下りて県道から現場付近の住宅街の狭い生活道路を走行していた。

現場は、歩車道区分のない幅員約5mの狭い道路で、両側に約0.7mの路側帯が設置された生活道路であったため、速度を30km/h以下に減速して、対向の原付や道路両側の歩行者を確認しながらやや中央寄りを走行していた。

前方右側に女性が同一方向に歩いており、左側には幼い子供Bが、やや早歩きしていたのを認めたが、子供が道路に飛び出してくると思わず運転していたところ、Bが急に道路反対側へ走り出した。Aは、びっくりして慌てて急ブレーキを踏

んだが間に合わず、Bと衝突し路上に転倒させた。

Aはトラックを停めて反対側にいた母親と共にBの様子を見ながら救急車を待った。

Bは右側頭部打撲、右肘部骨折の重傷を負った。

事故の原因

当日は納品先が北関東で、運転者の心理としては、毎日のように300~400km走行しているが、当日は約200kmの走行なので、時間的にも地理的にも余裕があり、事故現場の道路も閑散としており歩行者も少なく、油断した状態で走行していた。

事故当日は午前10時頃で、朝のラッシュ時間帯を過ぎていたこともあり、自車以外は原付等2台の走行のみで、歩行者も数人しかいなかったことから、危険に対する緊張感が低く、まさか子供が急に飛び出してくるなどと思わず、「かもしれない」との予測はしていなかった。Aは事故後、「そういう子供が急に飛び出した時、反対側にいた母親が子供に何か声を掛けたように見えたことと、小さな子供が近くにいる時は、赤信号と思えと平日頃指導されていたので、注意して見ていれば子供の事故の典型でもある飛び出しによる衝突事故を防げた」とその時の状況を振り返った。

安全指導

歩行者を被害者とする事故を発生場所別に見て、交差点での横断歩道上の事故及び生活道路での横断歩道以外の横断事故や、駐車車両の陰からの飛び出し事故等の特徴や注意すべき点をまとめました。

1. 「左折時事故」の巻き込みを警戒

交差点左折時の事故の中で、対歩行者は約1割と多くはないものの、交通弱者事故の典型であり、直接衝突すると傷害の程度が大きくなります。ま

た、「横断歩道上は、歩行者の絶対的聖地」という認識を持ち、特に横断歩道上への目配りを強くして、駆け込み横断者の巻き込みに警戒する必要があります。

2. 駐停車車両の陰の歩行者を確認

商店街や生活道路など駐停車車両が多い場所を通行する場合には、車の陰には歩行者がいることを予測して注意しながら通行することにより、車の陰からの横断・飛び出しの衝突を防止することができます。

3. 生活道路での歩行者の動きに注意

住宅街の生活道路では、歩行者が横断歩道外を横断している光景をよく見かけますが、通行車両が少ないことから、歩行者が道路上でも自宅庭先と同様に考えていることがあり、周囲を確認せずにいつでもどこでも、急な横断・飛び出しをするという危険があります。

4. 夜間は上向きライトで歩行者の早期発見

街路灯が少ない生活道路では、夜間での走行時に下向きライトでは照射範囲が狭いので、歩行者の発見が遅くなり、間に合わないことが多いため、夜間走行の基本である上向きライトで走行し、歩行者を早期に発見する必要があります。夜間は積極的に上向きライトを活用しましょう。



本事例は実際の事故とは異なります。